

米国ニュージャージー州、ニューブランズウィック市に、ラトガース **Rutgers University** という大学があります。十八世紀に設立された歴史があり、グリフィスや日下部太郎が卒業したラトガース・カレッジの後身です。その経緯から、福井大学と四十年にわたる提携関係にあります。

日下部は在学中に結核に罹病して亡くなりましたが、1870年4月15日、カレッジは休講して、この日本人留学生の葬儀を挙りました。市内の墓地ウィローグローヴに埋葬された遺体は、今もその地に眠っています。

墓域には日下部だけでなく、彼を含め八人の日本人が埋葬されて、墓標が並んでいます。そのうち七人は明治前期、二十代でアメリカ滞在中に亡くなった人たちであり、一人を除いて留学中の死でした。日下部以外はニュージャージーで亡くなったわけではありませんが、異国の地でひとり眠るのはさびしいだろうと、同じ場所に埋葬されたのです。

ひとつだけ、生まれて間もなく亡くなった女の子のお墓があります。やはり留学生にゆえんがあります。

ニューブランズウィックに最初に留学した日本人は、横井小楠の甥二人（左平太と大平）でした。彼らは同地でも長崎でも日下部とともに学んだ同志ですが、長崎に行く前は叔父の盟友勝海舟の元で学んでいました。海舟自身が、息子小鹿(ころく)をニューブランズウィック留学に送り出したのは、日下部が日本を発った五ヶ月後でした。まだ若年の小鹿に付添った二人の門弟がいました。仙台藩士の富田鉄之助と、庄内藩士の高木三郎です。留学二年目、祖国で革命・内戦が勃発し、彼らの主家も朝敵になりました。小鹿の保護を横井左平太に頼んで二人は帰国しますが、海舟に諭されて再び渡米し、留学を続けました。高木は日下部の死を見届けた後、明治政府の外交官として米国に駐在します。結婚し、現地で娘が生まれましたが、不幸にもすぐに息を引き取ったのでした。日下部の死から、七年後の事でした。

明治初期の留学生たちには、維新时期という革命の時代特有のドラマと、葛藤と、痛みがあります。鎖国を破った直後ゆえ、若者たちは異国での生活そのものに翻弄され、体を壊して夭折する者が少なくありませんでした。祖国の未来を、その決してたくましいとは言えない双肩に負う覚悟で、異国いや異世界に飛び込んで散った若者たち。日下部もまたその一人だった、志士としか呼びようのない哀しい群像の代表として、六人の無名の青年たちが海を渡った背景を少しだけ紹介させて下さい。

※ニューブランズウィック市は福井市および高木三郎の地元鶴岡市の姉妹都市です。

日下部太郎

越前福井藩士 1845～1870 享年 26
ニュージャージー州ニューブランズウィックの
ラトガース大学 Scientific School 卒業
※在学中に亡くなったが、卒業生と認められている。

長谷川雉郎

播州姫路藩士 1849～1871 享年 23
大学南校から留学生に選ばれ、ニューヨーク州
トロイ (Rensselaer Polytechnic Institute の所在地)
の教師宅に下宿して学んでいた。

松方蘇介

薩摩藩士 1850～1872 享年 23
薩摩藩出身の元老松方正義の兄正易の子。
留学生として岩倉使節団に随行渡米したが、
半年後コネティカット州で亡くなる。

小幡甚三郎

豊前中津藩士 1846～1873 享年 29
慶應義塾塾長。旧藩知事奥平昌邁に随行留学。
ニューヨーク州ブルックリンで勉学中、神経を
病み、フィラデルフィアの病院で亡くなる。

入江音次郎

長州藩士 ～1873 入江九一の妻の弟
薩摩藩密航留学生出身の官僚吉田清成に随行
して渡米したが、ニューヨークで亡くなる。
※享年は現地の墓碑銘が 19 歳、地元萩では 23 歳。

川崎新次郎

薩摩藩出身商人川崎正蔵の三男 1865～1885
ニューヨーク州ポーキプシーの有名な商業学校
Eastman Business College に留学。享年 21。

阪谷達三

備中の儒学者阪谷朗廬の三男 1859～1886
起立工商会社ニューヨーク支店赴任中逝去。
享年 28。弟芳郎は東京大学卒業、後大蔵大臣。

※享年は数え年です。(和暦なので西暦とのずれも生じます)

日下部の墓標とともに四人の日本人留学生が撮影された古い写真が、ラトガース大学のグリフィス・コレクションに残されています。撮影された青年は、旧福井藩士柳本直太郎（大学南校の助教。皇族華頂宮博経親王の留学に随行）、高木三郎、海援隊士白峰駿馬、そして薩摩藩士畠山義成です。畠山はラトガース大学における日下部の学友で、後に開成学校（グリフィスも教師として在籍。東京大学の前身）の校長を務めています。墓域の土地を日本人のために取得した初代駐米公使は森有礼ですが、彼もかつて畠山と共に密航した薩摩藩留学生の一人でした。幕末の留学生たちは帰国後、近代日本最初の学術結社「明六社」に集い、その代表を森が務めました。ところで、この洋学者団体には外国人のグリフィス以上に、異色の社員として存在感を示した人物がいました。社で唯一人の儒学者、阪谷朗廬(ろうろ)です。

外圧と排外テロに揺れる幕末、主君徳川慶喜のため一橋家領のある備中に募兵に赴いた渋沢栄一が、家領の学校を預かる朗廬と会って驚いたのは、儒学者と言えは鎖国攘夷一色だった当時、この高名な碩学が断然開国論を説いて止まないことでした。後に日米関係を支える人生を送った渋沢は、娘の一人を朗廬の四男芳郎に嫁がせますが、実はウィローグローヴに葬られた最後の日本人が、芳郎の最愛の兄達三です。身体の弱かった達三は商社のニューヨーク支店を建て直す激務に倒れたのでした。彼ら青年たちが前線で奮闘した殖産興業を最も必要とした明治日本の志、それは富国強兵でした。その志は幕末に発しました。

明治の政策を予め示した先覚とグリフィスが評した長州藩士吉田松陰。彼が外国人の任用を説き、自らペリーの黒船で米国に密航を試みたのは、外国に侮られて大義を堂々と掲げられない祖国の弱さを克服するためでした。晩年の松陰の心事を最も解した入江九一が、攘夷急進派の兵を挙げて京都で戦死した後、入江家を継いだ音次郎も維新後留学した米国で若い命を散らしました。志士の燃えるような尊王思想が、業火の中で国を統一し、ミカドの新政府は閣僚自身が大勢の随員・留学生と共に世界を巡る大視察団を組織しました。戊辰戦争の砲煙弾雨を生き延びた薩摩藩士松方蘇介(こすけ)が、視察団に随行して留学した米国で結核に斃れたのは、日下部が同じ病で亡くなった二年後でした。

新政府は幕府から引き継いだ江戸の洋学校（→大学南校→開成学校）に、全国諸藩の優秀な青年を集め、開化の発信源にしようと計画します。この南校の生徒から選抜されて米国に留学した大垣藩士松本荘一郎は、ニューヨーク州の工科学校を卒業した鉄道技術者として祖国に貢献しますが、彼の留学中の最も辛い経験は、共に海を渡った同窓の姫路藩士、長谷川雉郎(きじろう)の早すぎる死でした。

当時政府が教育において焦眉の急とみなしたものの、それは科学技術の修得でした。グリフィスが福井藩の理化学教師として招かれたのも、この科目が殖産

興業を成し遂げる実学の要と目されると共に、新たな安全保障の基礎として不可欠だったからです。武士たちが銃砲・火薬を製造し、蒸気艦を操らねばならない時代です。勝小鹿が卒業した米国海軍兵学校に、最初の日本人学生として薩摩藩の松村淳蔵と、横井左平太が入学した時、共にいるべき同志日下部太郎の余命はもう幾許もありませんでした。

その子弟がアメリカへ渡海した二人の儒学者、横井小楠と阪谷朗廬。彼らにとって大義の前には東洋も西洋もなく、富国も強兵も大義のためにありました。大義のため指導者自ら実用の学を修めねばならない。そう説いたのは福井藩の橋本左内であり、適塾で彼の同窓だった福沢諭吉でした。

「一身独立して一国独立す」。明六社に在籍した頃の福沢が主著で説いたのは、士族も平民も依存しない独立の気力がなければ、大国の軍艦を前にして怖れずに道理を貫くことなどできないという、激しいリアリズムでした。維新の戦火が江戸に迫る中、外国人に頼って身を守るぐらいならば同胞の刃に斃れるべきだと、慶應義塾の同門たちに諭して福沢を感激させた塾生小幡甚三郎。その訃報が留学先の米国から届いた時、福沢は全ての企図が崩れ去る悲しみに沈みました。

ミカドという真の君主のもとに統一された日本人が身分を越えて国に報じる時、どうして外国に独立をおびやかされる事などあるだろう・・・異世界のような外国にとびこんでいった維新期の留学生たちと、彼らの死に無念の涙を呑んで志を継いだ明治人の生は、哀しいまでに祖国愛に満ちていました。明治の末年、民間の造船所として初めて巡洋艦を建造した川崎造船所の社長松方幸次郎は、蘇介の従兄弟に当たりますが、造船所の創業者川崎正蔵も子息新次郎を留学先で失くしていました。ウィローグローヴに新次郎が埋葬された時に、ラトガースに留学していた幸次郎が涙を拭い、新たな決意をもってエール大学に転学し、正蔵の仕送りに援けられて、猛勉強の末博士号を修めて帰国しました。正蔵に見込まれて後継者となった幸次郎の名は今、祖国のために蒐集し、恐慌と戦火の中散逸しながら、残された一部が首都の国立美術館の礎となった、「松方コレクション」によって知られています。

参考文献 『阪谷芳郎伝』『横井小楠伝』『横井小楠遺稿』『吉田松陰全集別巻』

犬塚孝明『若き森有礼』 唐沢富太郎『貢進生』 神戸新聞社編『火輪の海』

小林功芳『英学と宣教の諸相』 阪谷芳直『三代の系譜』

塩崎智『アメリカ「知日派」の起源』 高木不二『幕末維新期の米国留学』

高橋秀悦「『海舟日記』に見る「忘れられた日銀総裁」 富田鐵之助」

西澤直子「小幡甚三郎のアメリカ留学」

Web サイト「日本漢文の世界 長谷川君父子瘞髮碑解説」

アメリカの若き薩摩藩士たち

大政奉還一年前の1866年11月4日（慶応二年九月二十七日）。その日ニューヨークに若き薩摩隼人の一行が到着した。遅れて合流した一名を加えて六名、彼らの渡米目的は、同じ月に同じ港に上陸した熊本藩の横井左平太・大平兄弟と同じく、留学だった。

アメリカから来日し横浜で活動していた **Dutch Reformed Church** の宣教師サミュエル R. ブラウンの母校でもある、マサチューセッツ州モンソンのアカデミーにそろって入学してから半年後、一行は一名の脱落者を最も悲しいかたちで出した。1867年7月22日、木藤市助（きとういちすけ）が行方不明になり、近隣住民たちが捜索したところ、立木に首を吊った遺体が発見された。遺書はなかったが、共に学ぶ同胞たちには、彼の精神が追い詰められた事情は明らかだった。

彼らは志士だった。国を守りたい、日本の名誉を回復したい、そのために西洋の軍事・技術を学ばねばならない。思いに猶予はなかったが、踏み出した近代学術修得への道程は、遼遠にすぎた。身心は大人だが、学力は中学生であり、異国での生活常識さえ持ち合わせない、無力な東洋人だった。誇り高ければ尚更、魂の生傷は絶えない。

木藤の自殺から二週間後、ニューヨーク港に日下部太郎が上陸した。「自分は異国で日本の恥をさらしはしない」。同胞の哀れな最期の伝聞に対して彼が示した反応にはすでに、この後三年間の留学生活で彼もまた自身の志によって自身を追い詰めていく人間であることが、露呈している。

日下部がニューヨークに到着した翌日、イギリスから海を渡って来た薩摩藩士六名の姿がボストンにあった。モンソンの藩士たちに一年先立って日本を離れ、主にロンドンで学んでいたのが薩摩藩最初の海外留学生だった。その一行の大半が帰国した後も、西洋文明との奮闘を続けていた侍たちが、彼らだった。

闘いは、やはり精神的なものだった。大英帝国絶頂期の都、西洋産業文明の中心に暮らす彼らには、その文明を取り入れなければ祖国に未来がないことは了解できた。ただ、その文明には、彼らの志す高みを裏切るものがあつた。人間の限りない欲望の奔流、弱肉強食の精神。その近代精神に祖国のみこまれるのならば、守るべき祖国とはいったい何だったのか。それは留学という使命の、根幹に関わる問いだった。

彼らの葛藤に応えたのが、外交団員として来日経験のあつた国会議員ローレンス・オリファントであり、彼が傾倒する神秘思想家 T. L. ハリスだった。ハリスは真のキリスト教文明からかけ離れた近代における人間再生のため、同信の人々と共同生活を営んでいた。北米ニューヨーク州にあつた、その田園共同体にオリファントが加わる決断をしたと聞いた時、迷える薩摩人たちは彼に従って大西洋を渡った。彼らは同藩の留学生在がいるモンソンへ向かい、合流して、ハリスが統めるコミュニティに入った。それは鳥羽伏見で砲声がとどろく、一ヶ月前のことだった。

江戸城が新政府軍に明け渡された翌月、1868年6月9日（明治元年閏四月十九日）、イギリスから渡米してハリスの共同体で暮らしていた薩摩藩士、森有礼と鮫島尚信が帰国の途に着いた。薩摩人たちが共同体に参加して半年、彼らはすでにそれぞれの道へと分かれていた。祖国を守るため国を離れた薩摩武士たちが、気がつけば異国で百姓をしていた。自己鍛錬の日々、神の前ではただ同じ人類というありようの気高さには救われても、彼らは日本人としてそこにあった。無理は続かなかった。モンソンから来た者はモンソンへ戻った。イギリスから来た六名のうち畠山義成たち三名は、同胞のいるニューブランズウィックへと去った。道心堅固に残った森と鮫島に、帰国を勧めたのは師のハリスだった。革命にゆれる彼らの祖国は、世界のため真摯にはたらく敬虔な武士を求めているはずだった。やがて彼らは政府の即戦力として、日本外交の最前線に立つ。

ふたりの甥をニューブランズウィックに留学させていた新政府参与、横井小楠が森と鮫島の来訪を受けたのは、その年の10月だった。青年たちと語り明かした小楠は、彼らからハリスの人物を聞いて、「此の利欲世界に頼むべきは此人物一人」と喜んだ。彼自身邪教の手先と誹謗されてテロに倒れる、四ヶ月前のことである。

「大義を四海に布かんのみ」。叔父小楠の言葉を胸に勉学に励んでいた横井兄弟の仲間として、日下部に続いて新たに加わった三人の同胞。イギリスですでに二年学んでいた畠山たち薩摩人は、日下部同様ラトガース・カレッジに入学した。日本人留学生たちの志が祖国の海防にあることを知る米国の理解者たちは、外国人の彼らが特別に海軍兵学校で学べるよう連邦政府にはたらきかけた。日本でも外交部局の幹部となったのは幕末薩摩藩を動かした小松帯刀だったから、異国で奮闘する薩摩藩士の願いはむげにされなかった。彼らの入学は許可されたが、1869年12月新たな鍛錬の道に入ったのは、左平太と薩摩藩の松村淳蔵だけだった。大平と日下部はすでに、結核に侵されていた。

「ナイアガラの滝に着き、そこから汽船に乗って・・・十分船旅を満喫しました」。大平が帰国の途に着いた翌月、日下部が有名な観光地を見物したと下宿の主人に書き送ったのは、ニューヨーク州北部の静養先からだった。それが彼にとって、最後の夏となった。翌1870年4月13日、日下部太郎は死んだ。一年後に少弁務使森有礼がアメリカに赴任し、日下部が埋葬された墓域を祖国の土地として購入した。八人の日本人が眠る墓地として、今も花が供えられている。木藤市助の墓は、モンソンにある。

幼いがゆえにハリスの元に残った薩摩藩士長澤鼎が、森と再会したのは1871年3月。グリフィスが福井に赴任した月であり、岩倉使節団が米国大統領と会見するちょうど一年前である。長澤は後に共同体が移ったカリフォルニアの田園を引き継いで永住し、「葡萄王」と呼ばれるワイナリー経営者として名を残した。森はその知性においてワシントンの外交官社会で高く評価された。その志において祖国の教育について熟慮する森が助言を求めた一人に、ラトガース大学マレー教授がいた。やがてマレーが日本で文部省の柱となり、畠山が開成学校校長となった。横井小楠の暗殺から二十年後、森もまた非国民と誹謗されて凶刃に倒れたが、それは彼が文部大臣在職中、憲法発布のその日だった。

新時代、旧藩士たちのアメリカ

徳川幕府最後の老中酒井忠清は、大坂城に拠る将軍家茂のため幕府軍の近代化を進めた。その酒井雅楽頭家を継いだ忠清は、京都南郊における旧幕府軍の敗報を受けて大坂城から逃走する徳川慶喜の傍に、最後の首席閣僚としてあった。落日の将軍家を守った徳川譜代を代表する大名が、討幕軍の第一の標的とされたのは必然だった。酒井家の居城は、山陽道の要塞として今も白亜の雄姿を仰がれ愛されている。備前から攻め寄せる軍勢との折衝を担い、江戸にいる藩主に代わって白鷺城を守り通した姫路藩大監察の名は亀山雲平美和。藩校の教授を務め、播磨の聖人と称された漢学者である。号は節宇。

姫路城下地蔵院の境内に「長谷川君父子瘞髪之碑」(以下『瘞髪碑』)はある。撰文は亀山節宇。「瘞(うづ)められた」父と子の髪とは、故郷から遠く離れた地で客死した藩士の遺髪である。父鍛冶馬の最期は安政六年(1859)、九州柳川だったが、子は遥かに遠い。米国ニュージャージー州ニューブランズウィックの墓地、ウィローグローヴ。姫路の青年の墓標は、日下部太郎の墓の隣に立っている。刻まれた命日は、西暦で11月18日。『瘞髪碑』では明治四年十一月七日(1871年12月18日)。長谷川雉郎、享年二十三。

「朝政一新し、外国の交際大いに開く。始めて大学南校を東京に設け、各国の教師を聘して、以て生徒を教ふ。君も亦校に入り、昕夕刻苦して毫も懈らず」。『瘞髪碑』文にある「大学南校」とは、幕府の洋学校の後身であり、東京大学の前身でもある。キャンパスは神田一ツ橋門外、護国寺ケ原。「洋書調所」と呼ばれた旧幕時代から変わらない。本校にあたる旧昌平黌から見た方角のままの校名だが、明治の新政府はこの洋学校に、諸藩から将来を見込むべき青年たちを留学させるよう命令した。小藩1名、中藩2名、大藩3名。つまり福井藩なら二人、鯖江藩なら一人、加賀金沢藩なら三人。「貢進生」と呼ばれた彼らを教える「各国の教師」の中には、明新館に赴任する前後のW. E. グリフィスもいたが、長谷川雉郎は彼の授業を受けていないはずである。大学南校が特に優秀な生徒を海外に留学させることに決し、グリフィスが来日する直前の1870年11月にアメリカの土を踏んだ、その貢進生のひとりに雉郎がいた。

「上は以て朝旨を対揚せんと欲し、下は以て父母を辱めざらんことを願ふ。其の心を用うること真に苦し。明治辛未の夏、喀血の疾を発し、冬に至つて益劇しく、終に起たず」。『瘞髪碑』に刻まれた文字を知り、福井藩儒吉田東篁が当館敷地に建つ『墮涙碑』において日下部太郎に捧げた文章を読む者は、ウィローグローヴに並んだ墓標に最早偶然を見ない。志士の死に様が似通うのならば、残された者たちの思いもまた、同様であったろう。「君の疾に寝て自り、以て瞑するに至るまで、吾が華頂親王以下諸搢紳及び生徒の彼の地に在る者、凡そ起居飲食及び殯斂の諸件、看護備具せり。而して其の最も心を盡し力を竭し、情誼骨肉に過る者は、同行の旧大垣藩士松本荘一郎なりしと云ふ。」長谷川雉郎最期の地となったニューヨーク州トロイ、その地のレンセラー工科大学を卒業した最初の日本人松本荘一郎が、祖国に大きく貢献したことは言うまでもない。

『瘞髮碑』にある「華頂親王」とは、皇族として初めて米国に留学した、華頂宮博経親王(1851~1876)である。新政府は発足当初、国策として海外視察・留学を奨励・推進した。1870年から翌年にかけての二年間に欧米に渡った留学者数は、おそらく二百名近く、幕末期全体の総計を上回る。世界を知ろうとするヤング・ジャパンを発した大波、その最後は岩倉使節団によって飾られた。自身の渡航前に子息をニューブランズウィックに送り出していた岩倉具視は、自らの出身母体である京都宮廷の人々をこそ、彼らが夷狄と蔑んできた外国の現実世界の中に放り込まねばならないと理解していた。

御一新。それは日本の真の君主であるミカドが、将軍に代わって国際社会の中で真に国家元首となることを意味した。天皇はもはや武家や公家たちの傀儡であってはならず、見えざる神秘的権威であってはならず、力強い指導者としての姿を、古代のごとく人民に直接仰がれねばならなかった。それは旧大名も同じだった。家来たちの合議を追認するだけの単なる旗印ならば、新時代に居場所はなかった。藩主の子弟だけでなく、廃藩で地方知事の座を降りた旧藩主自身の留学も珍しくなかった。松本荘一郎の旧主戸田氏共、旧臣長谷川雉郎の死後まもなく渡米した酒井忠邦らもその中にいた。他者への依頼心ではなく、個人が自立する気概をもって生きる国民によってこそ、国家もまた存立できる。福澤諭吉はそれを、「一身独立」と表現した。

現実はまだ、別の話である。「お公家さん」「お大名」の留学には、有能な付き添いが必要だった。華頂宮には、渡米経験のある旧福井藩士で当時南校の教師だった、柳本直太郎が同行した。有能な士族にとっては、VIPに付き従うことはまたとない自身の留学の機会でもあった。福澤の勧めにより、彼の旧主である中津藩知事奥平昌邁が廃藩後渡米留学を決めた時、慶應義塾塾長をつとめた旧藩士小幡甚三郎が随行者に選ばれた。その名はウィローグローヴの墓標に刻まれている。逝去は明治六(1873)年一月。

「全く初旅の処へ言語は不通、連は大名連れ、余り心配し過ぎて少しよわり候までのことにて、決して真の病気では之無」・・・亡くなる一年前小幡が故郷の母に送った文面の気遣いに、端無くも苦勞が表れている。福澤に最も将来を囑望された洋学者でさえ、いやそうであればこそ、初めての海外体験で旧主の通訳・従者としての務めを到底十分に果たし得ない自分の無力を責め苛む。ニューヨーク州ブルックリンで学んでいた小幡の最期の地がフィラデルフィアなのは、彼の主人の奥平が「費用を厭わず最上の療養」を受けさせたいと望んだ結果である。「御病人元來神經を過分に勞したれば、其の力衰え」・・・同地精神病院主治医の診断書が悲しい。享年二十九(満27歳)。

「同人は生涯の一親友、これまで共に謀りしことも多く・・・様々に後日の事のみ予め期して相樂み居候処・・・心中の百事一時に瓦解、何事も手に付不申」。福澤が「甚さん」の訃報に「強て自ら慰めんとすれども・・・止めて止まら」なかった情理は、彼が生涯繰り返した語った戊辰戦時の逸話から察せられる。居留外国人の庇護下に戦火を避けようとする塾生に対して、内戦の難を外国に頼って逃れ一身独立の大義を忘れるならば、生きのびても義塾の命脈は絶たれると凜然と説く小幡の前に、誰も一言も発し得なかった。

志士たちの、母なる日本

1872(明治五)年8月、米国コネティカット州ファーミントンで静養していた留学生松方蘇介が亡くなったとき、従兄弟の幸次郎は6歳だった。十二年後に幸次郎がニューブランズウィック市のラトガース大学に留学した時、市内の墓地ウィローグローヴに蘇介の眠る墓があった。他に並び建つ墓標に刻まれた名は、日下部太郎、長谷川雉郎、小幡甚三郎、入江音次郎。彼ら留学生たちの墓の傍らに、外交官高木三郎の夭折した娘の小さな墓があった。幸次郎の留学中、もう一つ墓標が立った。彼にとって他人ではない青年の墓だった。薩摩の政商として知られる川崎正蔵の三男、新次郎(1865~1885)。幸次郎は父松方正義と癒着する正蔵の仕送りを受けて、その地で学んでいた。

1913(大正二)年12月、神戸で巡洋艦榛名が進水した。それは川崎造船所社長松方幸次郎の悲願の達成であり、幕末明治の志士たちの苦闘の末の光景だった。1855(安政二)年、幕府がお雇いオランダ人の力で長崎に海軍学校を設け、数年後に造船所も作った。その学校で学んだ幕臣榎本武揚たちが、1862(文久元)年にオランダへ留学した。近代最初の海外留学生であり、榎本たちは開陽丸を操船して帰国した。開陽丸が江差の冬の海に沈んだ半年後1869(明治二)年夏、榎本たちは函館五稜郭を開城して新政府に降った。その年の末、横井左平太と松村淳蔵が米国海軍兵学校に入学した。幕府が設けた江戸の海軍学校と横須賀ドックは、新政府に引き継がれ、明治の資産となった。民間の造船所もできたが、いわゆる主力級の戦艦を海軍から発注されることはなかった。富国強兵、殖産興業・・・それは政府・軍官僚だけの志ではなかった。「一身独立して一国独立す」。私学慶應義塾が掲げた新しい日本人の姿を希求する、全国の士族、平民、民間留学生たちの志でもあった。川崎造船所が遂に、ひとつの壁を突き破ったのだった。

「国の衰へたる、古より未だ曾てあらざるなり・・・黙然座視して皇恩に報ぜんことを思はざるに忍びざるなり。然らば則ち吾れの海に航せしこと、あに已むを得んや」。松陰吉田寅次郎の海外渡航の試みは、政府の命ではなかった。ひとりの地方武士の志に発した、違法行為だった。誰に頼まれもせず、国を憂える者が、新たな国策を胸に宿した。「今宜しく俊才を各国に遣はして、其の国の書を購ひ、其の學術を求めしめ、因て其の人を立てて学校の師員と為すべし」「宜しく兵学校を興し、諸道の士を教へ」「人を海外に遣はし・・・以て軍艦を購ふ」。それは明治の国策となった。

落日の幕府が君主たるミカドに背反した時、吉田松陰はテロリストとなった。松下村塾の生徒たちは師の激発に従わなかったが、入江杉蔵(九一)・(野村)和作の兄弟は例外だった。クーデター工作のため弟が上洛した時、兄が萩に留まったのは、残される母の身を二人が案じたからだった。忠と孝が背反するとき、近世の武士は追いつめられた。松陰が江戸で刑死して五年後、九一が京都で戦死した。妻の弟音次郎が入江家を継いだ。彼も留学先のアメリカで死んだ。和作(野村靖)の子息貫一が、父の実家を継いだ。入江音次郎の死は1873年3月20日。小幡甚三郎の死の二ヶ月後である。

入江九一が倒れた内戦、禁門の変。この内戦で、同門の久坂玄瑞も死んだ。久坂は上洛の途次備中で、同地の高名な儒者と「席を叩いて駁撃弁難、怒声四壁に震ふ」という激論を夜が明けるまで交わした。訣別は清々しいものだった。「先生は先生の信ずる所を為せ」「僕生まれて以来未だ此夜の如き愉快を知らず」久坂がそう言い残して別れた儒者の名を、阪谷朗廬という。

大坂で大塩中齋、江戸で古賀侗庵に学び、「海内の儒宗」と称されるまでになった朗廬が、諸藩からの招聘を全て断って家郷にあったのは、母のためだった。洋学修行に赴いた先の大坂で母の危篤を知って帰郷して以来、彼は備中であって動かなかった。「先生は頻りに開国説を主張された。・・今日欧米諸国の和親通商を望むのは決して往昔の旧教派の侵略主義ではない、然るを日本では只之を排斥して諺に云ふ人を見れば盜賊と思ふの故態を以てするは、人道に欠くるのみならず世界協同の趣旨にも背馳する故に、朗廬は徹頭徹尾開国主義である、と云はれた」。朗廬の子息芳郎に娘を嫁がせた洪沢栄一は、幕末において異色の儒者と見えた時の驚きを後に回顧している。その儒者の洋学への熱意は、東京に移住した明治になっても冷めていなかった。

小幡甚三郎や入江音次郎が亡くなった年の名を冠した近代日本最初の学術誌『明六雑誌』。寄稿者は森有礼、福澤諭吉たち一級の洋学者だったが、彼らを遙かに上回る数の論考を寄せたのが、朗廬だった。「洋書は少しも読みませず、唯々翻訳の中を百分一ほど読み、又此社諸先生の御話しを時々承ります位の義、・・和漢欧米風土は異なりますも道理に二つは御座りませぬと、皆様の御論が承りたきと、又稽古の為と存じまして面の皮のあつくも御聴を願ひます」。グリフィスの生徒でイギリスに留学し、洪沢の娘婿となった法学者穂積陳重は、会う機会を持てなかった碩学の残した語り口に魅せられ、こう評している。「陋巷に在つて樂を改めざる人にして高車駟馬冠冕の人より尊いこともあります。朗廬先生の如きは官爵を超越した学者であると思ひます」。

朗廬が亡くなって五年後、彼の三男達三がニューヨークで客死した。達三が身体を壊したのは、慶應義塾で学んでいた時だった。癒えて後、勉学を再開し、貿易商社「起立工商会社」に職を得たが、励むほどに病は再発の機を得た。渡米前、達三は母の元に戻り、その夜芳郎と同じ部屋で寝た。心配する弟に、身体の強いお前が家を継いでくれと言ひ残した。彼は同僚には「商人の商事に死するは、武夫の戦場に斃るるが如し。何ぞ恐るるに足らん」と語っていた。1886年4月16日、その二日前に達三が亡くなったと、母国の家族に電報が知らせた。遺体はウィローグローヴに埋葬された。享年二十七。芳郎は後、東京大学を卒業し、財務官僚として松方正義を支え、大蔵大臣となった。

起立工商会社が扱った主要な輸出品は日本美術だった。幕末明治は西洋にジャポニズムを生み、松方幸次郎は浮世絵師こそ日本の恩人であるとして、その作品を祖国に買い戻した。また本物の西洋美術を母国の青年に見せるために、松方コレクションは生まれた。コレクター松方には、海軍の意を受けて欧州に滞在する軍事スパイという、裏の顔もあった。祖国の名誉と、母国の安寧。維新の志は今も、日本人を引き裂いている。